

雜 餉 限 遺 跡 6

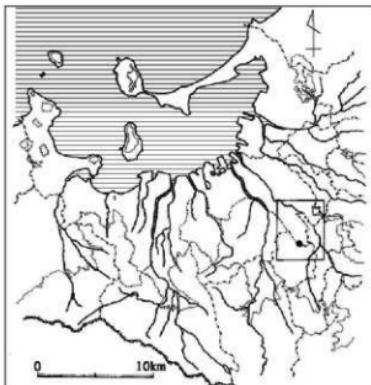
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第877集

2006

福岡市教育委員会

雜 餉 限 遺 跡 6

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第877集



0 10km

遺跡略号 ZSK-17
遺跡調査番号 0460

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された雑餉隈遺跡第17次調査の報告であります。発掘調査の結果、奈良時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。過去に発掘調査された雑餉隈遺跡の別地点でも同様に奈良時代の遺物・遺構が発見されており、雑餉隈遺跡が奈良時代の大集落であったこと明らかになりました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、株式会社ソロンコーポレーションをはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立つて、福岡市教育委員会が、2004年11月1日～30日にかけて行った
雑鈴殿遺跡第17次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2,のように通し番
号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSC-1のよう
に記述する。なお本文では遺構を通し番号順に記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財課 星野恵美・同 赤坂亨が作成し、赤
坂が製図した。
5. 本書で使用した遺物実測図は赤坂が作成・製図した。
6. 本書で使用した写真は、星野・赤坂が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
8. 第1表において残存率の>10%は10%以下、計測値の（）は図上復元による推定値を示す。
9. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
10. 遺物の時期比定には以下の文献を参照した。
森田勉1983「大宰府の出土品3 土器 陶磁器」「佛教藝術」146号
山村信榮1995「八世紀初頭の諸問題－筑紫における須恵器の年代観－」「大宰府陶磁器研究－森
田勉氏追悼論文集－」森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
11. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用さ
れたい。

遺跡調査番号	0460		遺跡略号	ZSK-17	
地番	福岡市博多区新和町1丁目102番1地内		分布地図番号	No.13雑鈴殿	
開発面積	1234.64m ²	調査対象面積	427.79m ²	調査面積	487.44m ²

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 雜餉隈遺跡周辺の地理的環境と歴史的展開	2
III. 調査の記録	
1. 概要	5
2. 層序	5
3. 古代の遺構・遺物	7
4. 旧石器時代遺物確認調査	15
IV. 小結	16

挿図目次

第1図 雜餉隈遺跡および周辺遺跡 (1/25,000)	3
第2図 雜餉隈遺跡第17次調査区位置図 (1/2,000)	4
第3図 雜餉隈遺跡第17次調査遺構全体図 (1/100)	5
第4図 西壁土層図 (1/40)	6
第5図 SC-1実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	8
第6図 SC-1出土遺物実測図2 (1/3)	9
第7図 SK-2実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	10
第8図 SC-3実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	11
第9図 SD-4実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	12
第10図 I・3区旧石器調査状況 (1/80) および出土遺物実測図 (1/1)	14

表目次

第1表 雜餉隈遺跡第17次調査出土遺物観察表	17
------------------------	----

図版目次

PL1 1. 雜餉隈遺跡第17次調査区全景その1	2. 雜餉隈遺跡第17次調査区全景その2
PL2 1. SC-1・SC-3	2. SC-1遺物出土状況
PL3 1. SC-1西側土層	2. SC-1土層
PL4 1. SC-1カマド土層	2. SC-1完掘状況
PL5 1. SK-2完掘状況	2. SK-2土層
PL6 1. SC-3	2. SC-3カマド土層
PL7 1. SC-3完掘状況	2. SC-3カマド
PL8 1. SD-4完掘状況	2. I区深掘土層
PL9 1. 調査前クスノキ移植作業風景	2. 調査終了後状況

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成16年6月22日付けで株式会社ソロンコーポレーションより、福岡市教育委員会埋蔵文化財課宛に、福岡市博多区新和町1丁目102番1の物件に関して、共同住宅建設に因る埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号16-2-318）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雜餉隈遺跡（分布地図番号13-0054・遺跡略号ZSK）に含まれている地点であり、道路を挟んだ西側隣接地で行われた第14・15次調査では弥生時代と古代遺構・遺物が検出されていた。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成16年8月31日に申請地内の試掘調査を行った。申請地が福岡市博多区新和町1丁目102番1と春日市千歳町2丁目157番1にまたがっていることから、試掘調査では福岡市側のみでなく春日市側の試掘調査も同時に実施した。その結果、福岡市側では現地表面から-50～-110cm下の鳥栖ローム層上面で古代と思われるピット等の遺構を確認した。また、春日市側では現地表下-220cm前後まで真砂土による埋土で、一部深掘りした部分では現地表下-235cmでヘドロ状の黒色泥質土、現地表下-275cmで鳥栖ローム層となり遺構は確認できなかった。この結果は遺跡周辺の旧地図に記載されている池の存在と合致し、春日市側には遺構が存在しないが、福岡市側にはローム段丘面が残り、遺構が存在することが推測された。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ること協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積1234.64m²（福岡市側）のうち、6階建て共同建築建物部分の427.79m²である。

調査期間は平成16年11月1日から11月30日までである（調査番号0460）。調査面積は487.44m²である（一部春日市側含む）。遺物はコンテナ3箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社ソロンコーポレーションをはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 前田双子

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 山口謙治

調査第2係長 池崎謙一

調査庶務 御手洗清（前任）鈴木由喜（現任）

調査担当 調査第2係 星野恵美 赤坂亨

調査作業 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵 米倉國弘 草場恵子 辻美佐江 村井藤枝

大崎宏之 村山巳代子 西村登 西村寿美枝

II. 雜餉隈遺跡周辺の地理的環境と歴史的展開

雜餉隈遺跡は福岡市の最南端に位置し、須玖丘陵の北東に延びる台地上にある。この台地には多くの支谷が入り込み、幾つかの舌状台地を形成する。これらはそれぞれ南八幡遺跡（第2図-2）、妻野C遺跡（同図-5）、妻野A遺跡（同図-4）、妻野B遺跡（同図-3）と台地毎に小字を冠した遺跡名がつけられているが、それぞれの遺跡の境界は判然としない。雜餉隈遺跡はこの台地の南側に位置し、前述した遺跡とは支谷で隔てられているが、遺跡の時代・内容ともに類似している。これらの同一台地上の遺跡全体を総称して「妻野・雜餉隈遺跡群」とする見方もある。

雜餉隈遺跡は現在までに17次にわたる調査が行われている。以下、調査の成果から雜餉隈遺跡の歴史的展開をみていくこととする。

雜餉隈遺跡で最も古い遺物は旧石器時代の石刃・剥片であり、雜餉隈5次・7次・10次・13次・14次調査地点で見つかっている。5次調査では弥生・古代の遺構中よりナイフ形石器・細石刃・削器・剥片石器・剥片・石核が¹、7次調査では遺構検出面より剥片が²、10次調査ではローム層中より敲打器・剥片が³、13次調査ではローム層中より石核（接合資料）・剥片・碎片⁴が⁵、14次調査ではローム層中より三稜尖頭器・剥片が⁶、それぞれ出土している。雜餉隈遺跡全体での旧石器遺物の出土地点の分布傾向を見ると遺跡内でも南側の、10調査を中心とした直径約200mの円内に集中している。雜餉隈遺跡の調査が17回中11回の調査がこの地域で行われているという発掘調査の偏りもあるが、この範囲に集中するという傾向は注意しておくべき事であろう。吉留秀敏氏の整理によると、旧石器時代における雜餉隈遺跡出土の石器はナイフ形石器段階のうちAT（姶良—丹沢）降下火山灰以後の時期に該当するという。縄文時代の遺構遺物は現までのところ出土例がない。

弥生時代開始期になると遺構・遺物の出土が見られるようになる。14次調査では夜臼式系の弥生土器の出土した土坑、有柄式磨製石剣や有茎式磨製石鏡を伴う木棺墓がみつかっている⁷。また5次調査では前期の円形住居・方形土坑・貯蔵穴、中期の方形住居がみつかっている⁸。この時期を最後に雜餉隈遺跡では古墳時代の終わりまで遺構遺物が姿を消すこととなる。

7世紀末～8世紀になると突然遺構・遺物が急増し、大集落を形成するようになる。9次調査では大型掘立柱建物がみつかっている。また同時期の堅穴式住居・円形土坑も雜餉隈遺跡全域で多数発見され、8世紀の遺構は雜餉隈遺跡の全調査地点で検出されている。ところが9世紀以降になると遺構遺物は姿を消し、集落もごく短期間のうちに廃絶されたようである。

その後中世・近世における雜餉隈遺跡での遺構はこれまでのところ確認されていない。明治期の古地図では17次調査周辺は林もしくは畠地になっており、古代以降近代まで集落としての土地利用がなされなかつた可能性がある。

1 宮井吉則1998「II. 雜餉隈遺跡周辺の地理的・歴史的環境」『雜餉隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財報告書第569集（福岡市教育委員会）
2 山口謙治・宮井吉則1998「III-2. 先土器時代の研究」『雜餉隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財報告書第569集（福岡市教育委員会）
3 大庭原玲1998「付録 雜餉隈遺跡第7次調査」『雜餉隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財報告書第569集（福岡市教育委員会）
4 同2文献
5 古武72005「IX. 雜餉隈遺跡第13次調査」『中南部(8)』福岡市埋蔵文化財報告書第867集（福岡市教育委員会）
6 堀光志季・入江俊一・天野直子2005「雜餉隈遺跡5」福岡市埋蔵文化財報告書第868号（同二リビック 埋蔵文化財調査室）
7 同8文献
8 宮井吉則・山口謙治1998「雜餉隈遺跡4」福岡市埋蔵文化財報告書第569集（福岡市教育委員会）
9 加藤邦也1998「3 雜餉隈遺跡-第9次調査-」『中南部(5)』福岡市埋蔵文化財報告書第870集（福岡市教育委員会）



1. 雅網道跡 2. 南八幡道跡 3. 鬼野B道跡 4. 鬼野A道跡 5. 鬼野C道跡 6. 井相田B道跡 7. 井相田A道跡 8. 井相田C道跡
 9. 仲島道跡 10. 高畠道跡 11. 板村道跡 12. 富岡B道跡 13. 富岡道跡 14. 三氣道跡 15. 京政道跡 16. 国本道跡
 17. 下月隈C道跡 18. 立花寺B道跡 19. 立花寺道跡 20. 全隈道跡 21. 全隈上岸坂道跡 22. 影ヶ浦道跡 23. 特田ヶ浦古墳群
 E群 24. 菊ヶ浦古墳群 25. 特田ヶ浦古墳群 26. 勝波古墳群

第1図 雅網道跡および周辺道跡 (1:25000)



第2図 猿削道路第17次調査区位置図 (1:2000)

III. 調査の記録

1. 概要

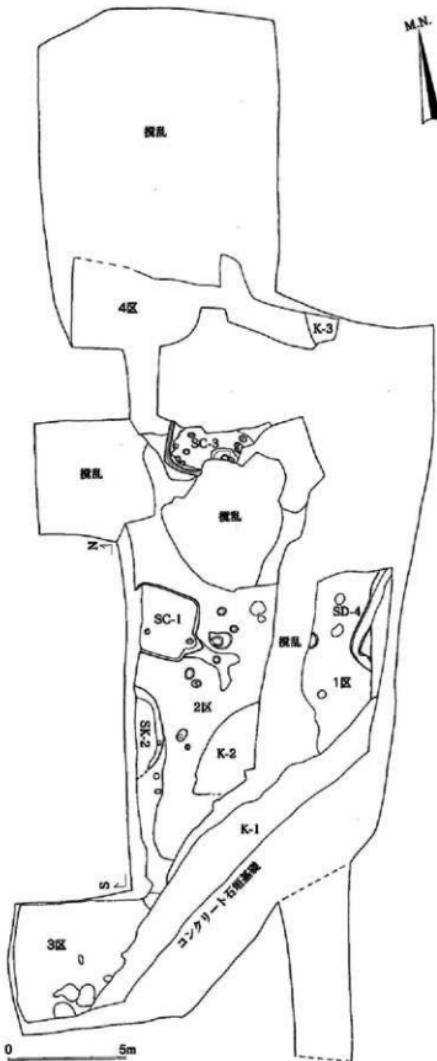
本調査(雜飼隈遺跡第17次調査)では奈良時代の方形の堅穴式住居跡2基、性格不明の円形遺構1基、溝状造構1基を検出した。

調査区は北側と中央部を間隔清明寮のコンクリート基礎柱により、北西部を大クスノキ2本(調査開始前に植え替えを行う。PL9-1)の根と埋設された污水タンクにより、中央部を汚水タンクから南北にのびる排水パイプにより、南側を池により、それぞれ大きく搅乱を受けている。搅乱を境にして、中央部より東側を1区、西側を2区、共同住宅の階段建設予定地で南西側の張り出した部分を3区、北側の寮の基礎による搅乱間に残った部分を4区とした。

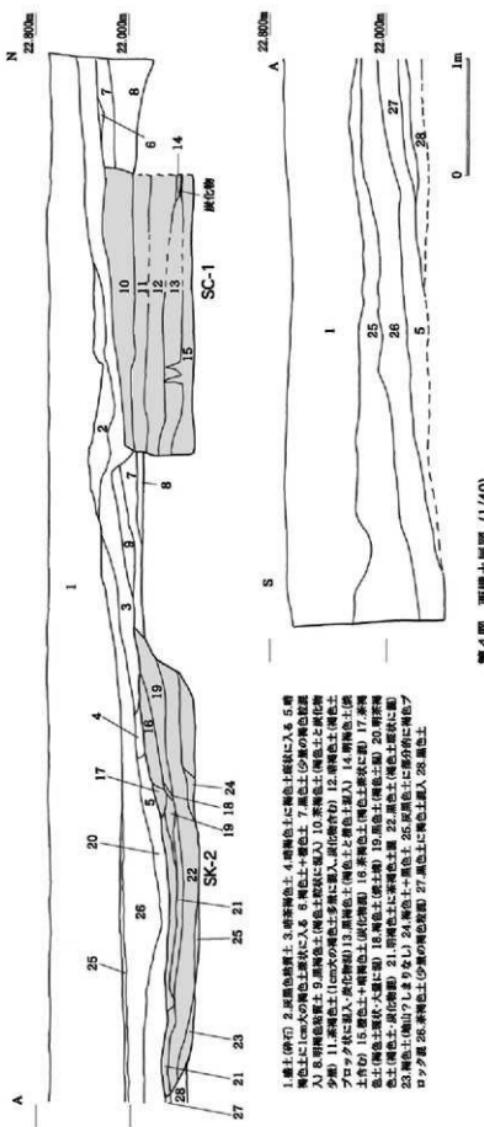
南端では市境に沿って石垣の基礎が残り、裏込部から大きく削平されている。石垣の南の春日市側は元来、池であったようで、遺構は存在しないことが試掘時に確認されている。

遺物は奈良時代の土師器・須恵器がコンテナ3箱分出土した。また住居址内と遺構面の全体下げ時に黒曜石が2点出土した。

東側の14次調査で旧石器時代の遺物が出土しており、本調査地でも存在する可能性があったが、今回の調査地では確認できなかつた。また弥生時代早期の木棺墓群も東側の15次調査で確認されていて、本調査地点にも関連遺構が存在する可能性があったが検出されなかつた。



第3図 雜飼隈遺跡第17次調査遺構全体図 (1/100)



第4図 西壁土層図 (1/40)

1. 黒土(腐泥) 2. 黄褐色粘土 3. 黄褐色土+4. 黄褐色土+5. 黄褐色土+6. 黄褐色土+7. 黄褐色土(少の褐色混入)
褐色土(少の褐色混入) 8. 黄褐色土+9. 黄褐色土(褐色土質に混入) 10. 黄褐色土+11. 黄褐色土+12. 黄褐色土+13. 黄褐色土(褐色土質に混入) 14. 黄褐色土(褐色土質に混入) 15. 黄褐色土(褐色土質に混入) 16. 黄褐色土(褐色土質に混入) 17. 黄褐色土(褐色土質に混入) 18. 黄褐色土(褐色土質に混入) 19. 黄褐色土(褐色土質に混入) 20. 黄褐色土(褐色土質に混入) 21. 黄褐色土+22. 黄褐色土+23. 黄褐色土+24. 黄褐色土+25. 黄褐色土+26. 黄褐色土
ロッカ屋 28. 黄褐色土(少の褐色混入) 27. 黄褐色土+褐色土質 28. 黄褐色土

調査は2004年11月1日・2日のバックホウによる調査区内の表土剥ぎより開始した。11月4日、作業員を入れ、外構等の条件整備を行った後、掘削の人力掘削を行う。11月10日より遺構検出を行う。11月12日、竪穴式住居など遺構の掘り下げにとりかかる。調査担当の赤坂亨が足の怪我により1週間程度入院する必要が生じたため、11月17日より星野恵美に担当者が変更になる。11月18日、遺構を完掘。11月19日、高所作業車より調査区の全景撮影。11月22日、住居跡の土層観察ベルトを外し完掘、旧石器遺物確認のためにローム層を下げる。11月29・30日、バックホウによる埋め戻し。11月30日、機材と遺物の引き上げを行い、調査を終了した。

2. 層序

層序は2区の西壁（第3図N-S）で確認した。地山は明褐～暗赤褐色で粘性の強い土である鳥栖ローム層で、西壁北側では標高21.900m、南側では21.300mで確認された。調査区全体で見ると竪穴式住居のSC-1から北側は台地の平坦面であるが、これより南側は北から南に下る緩斜面となる。

第4図の7層、9層、27層、28層が旧表土である。黒～黒褐色土で、7層、9層を切るようにして遺構SC-1、SK-2が掘り込まれている。また27層、28層の堆積状況を見るとSK-2は当初から傾斜地につくられたようである。旧表土の上に3層、26層の茶褐～暗茶褐色土が斜めに堆積し斜面を形成していたが、近年になって2層、25層の灰黒色粘質土をおそらく人為的に埋め立てて傾斜をなくし、その上に碎石を敷き詰め水平にして、寮の敷地として利用していたようである。

3. 古代の遺構・遺物

SC-1 竪穴式住居跡（第5・6図）

遺構

2区の北側、台地平坦面の縁に位置する。残存状況は良好。西壁が調査区外に延びていて、全容は不明だが、おそらく平面形は南北2.8m×東西3.0mの隅丸長方形を呈する。主軸はN-108°-Eでカマドが東壁の中央からやや南東隅に寄った部分につくられている。壁はほぼ垂直からやや外側に聞くように削られていて、壁高は50cmを測る。柱穴は一基確認された。住居内に周溝は巡らしていない。床面はあまり硬化しておらず、地山との差はほとんどない。土層は水平堆積していて乱れはない。住居の最下層である5層は地山のローム層に炭化物が混ざったものだが、貼り床ではない。

カマドは煙道部が突出し、燃焼口幅の広い形状を呈する。中心軸長は80cm、燃焼口幅70cmを測る。燃焼口中央部に直径20cm・深さ3cmの円形の凹みが存在する。壁・床面とともに火熱を受けた痕跡は認められなかった。袖部は存在しなかったが、カマドの土層に白色土を含んだ黒褐色土の1'層があり（第5図）、粘土でつくられた袖が存在していた可能性がある。

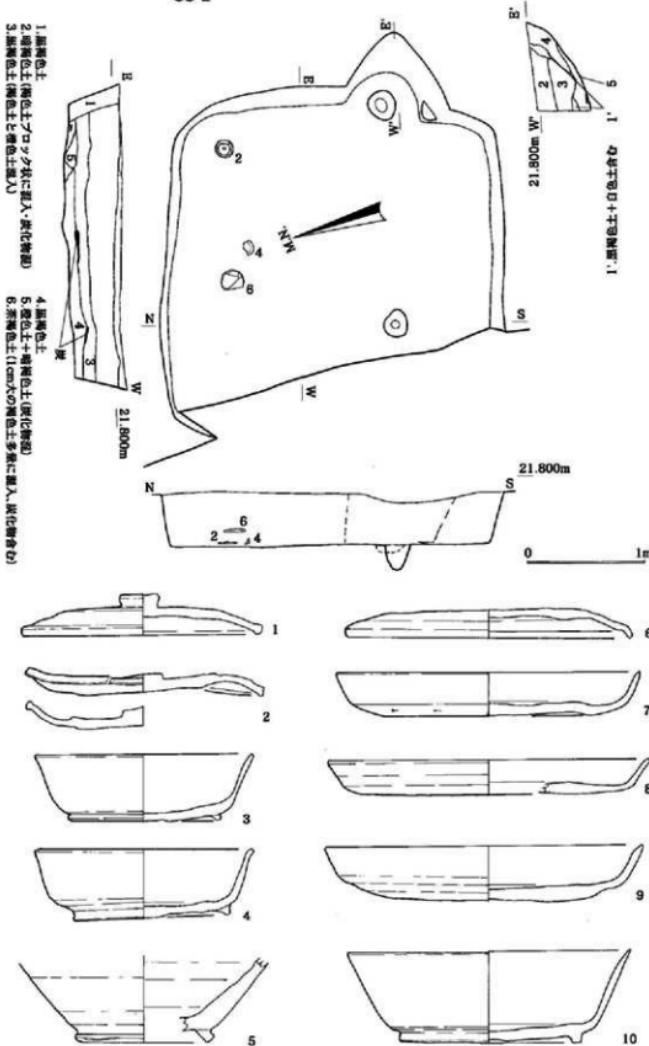
住居の主軸方向、規模、形状、カマドの位置は、隣接する第14次調査の竪穴式住居跡SC001、SC006に類似するが、周溝を有するなど異なる部分もある。

遺物

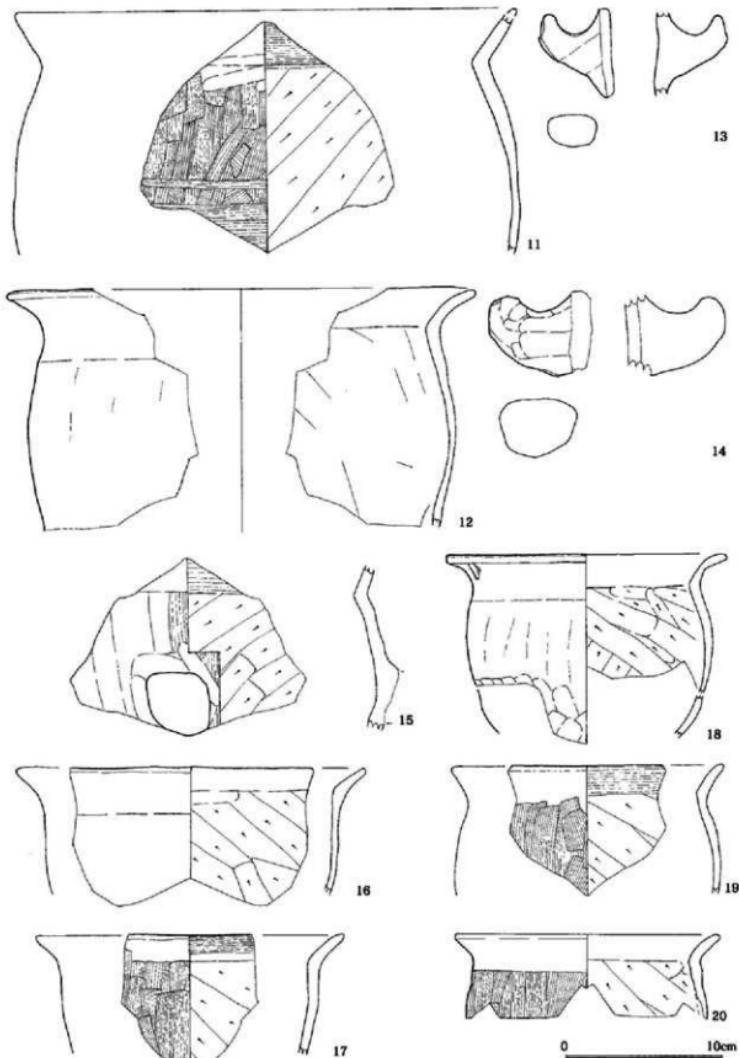
住居内の埋土からの遺物出土量は多かった。杯は完形に近い形での出土例が多かったが、土師器の甕はすべて破損した形で出土し、全体の形状の分かるものはなかった。1~9が須恵器、10~20が土師器である。2は北西隅の中層、4・6は北側の下層で出土した。

杯蓋はすべて須恵器で、ツマミのあるもの（1・2）とないもの（6）の2種類が認められる。ツマミのあるものは口縁部の断面形が半円形を呈する。ツマミのないものは口縁端部を内側に「く」の字に屈曲させている。口径はツマミのないものの方が直径で3cm程大きい。

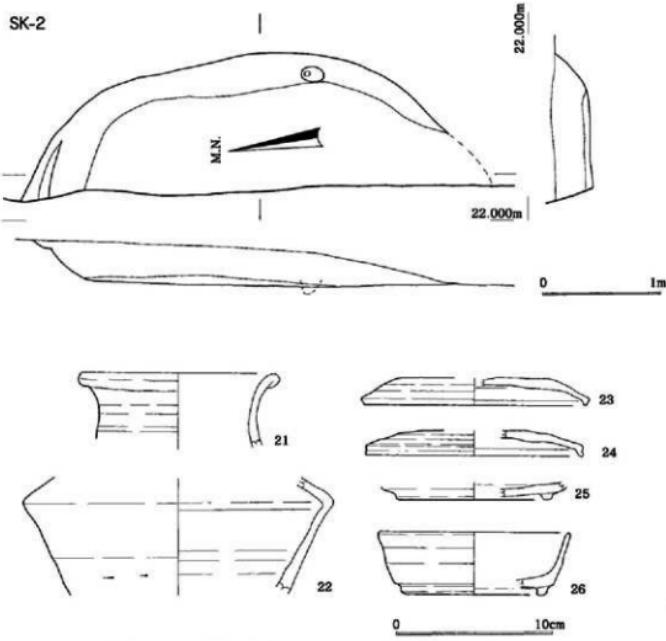
SC-2



第五図 SC-1実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



第6図 SC-1出土遺物実測図2 (1/3)



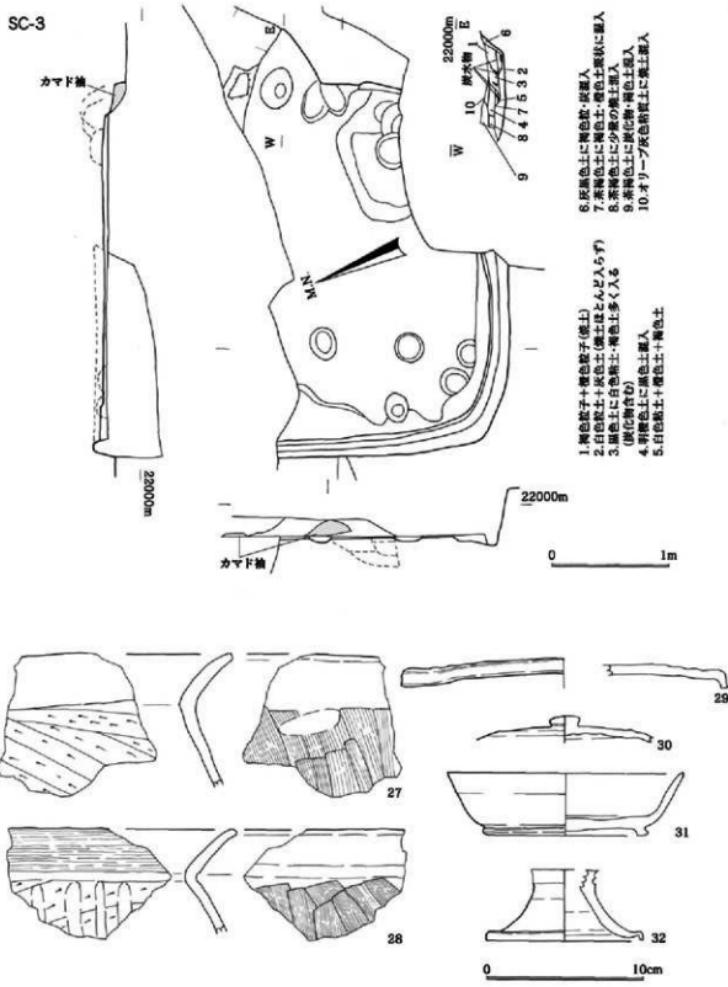
第7図 SK-2実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

杯身は須恵器（3・4）と土師器（10）の二つがある。10は黒斑があり、内面が橙色なので土師器としたが、須恵器が焼成時に十分に還元されず土師質に焼成された可能性がある。杯身は口径14.0cmのもの（3・4）と18.2cmのもの（10）との大・小の二種に分けられる。小杯身は杯蓋ツマミ有り（1・2）と、大杯身は杯蓋ツマミ無し（6）と組み合うが、出土状態からは組み合わせを復元することはできない。高台の断面は長方形のもの（3・10）と三角形のもの（4）がある。

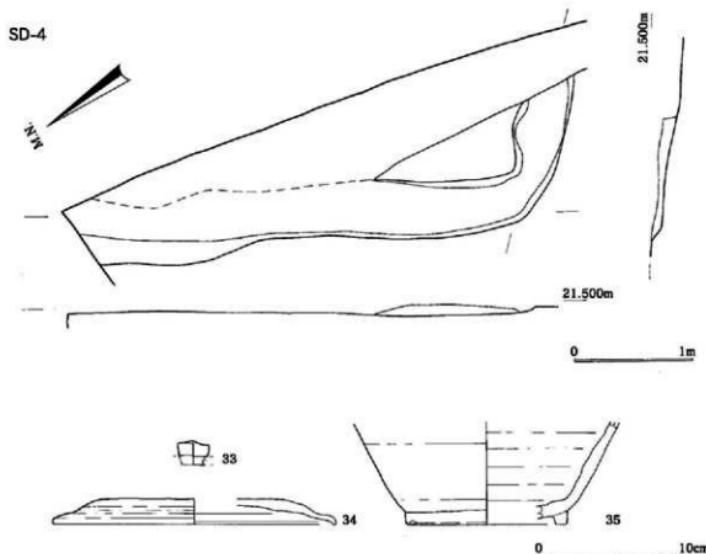
皿（7～9）は全て須恵器でいずれも口径20cm前後を測る。5は蓋の底部。断面長方形の高台が付く。長頸壺の可能性がある。

壺は大型のもの（11・12・15）と小型のもの（16～20）がある。大型の壺には把手が付くものがある（13～15）。いずれも残存状況は不良であるが、壺の個数が多い。使用不能になったものを住居内に廻棄した可能性がある。

須恵器の杯身・杯蓋の形状から判断して、SC-1出土遺物の時期は森田B-1期（8世紀前半から中期）、山村F期（8世紀第2四半期）であろう。



第8図 SC-3実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



第9図 SC-4実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SK-2 円形土坑もしくは堅穴式住居跡（第7図）

遺構

2区の中央、台地斜面に位置する。残存状況は良好。東壁のみが調査範囲内にあり、それ以外の部分は調査区外に位置している。全容は不明だが、南北4.0mを囲り、隅丸長方形もしくは円形と推測される。主軸・カマドの有無は不明。壁は約45°の傾斜で外側に開くように削られ、壁高は北側で30cmを測る。ピットが東壁際に1基確認された。周溝は巡らしていない。床面はあまり硬化しておらず、地山との差はほとんどない。土層は傾斜に沿って北から南へ緩やかに下りながら斜めに堆積する（第2図）。貼り床は認められない。SK-2は堅穴式住居の要素もっているが、積極的に住居と認定できる根拠がないため、円形土坑として取り扱うこととした。類似の遺構として第14次調査SK020がある。

遺物

埋土中から多くの遺物が出土したが、完形は杯のみであり、その他は破片であった。土師器も出土したが、図示可能だったのは須恵器のみであった。21は壺の口縁部、26は長頸壺の肩部、23・24が杯蓋、25・26が杯身である。杯蓋のツマミの有無は不明。口径は23・24とも14cm前後で、口縁端部は23がわずかに断面三角形を呈す。杯身の26は立ち上がりが垂直であり外に開かない。高台は25・26とも断面長方形である。

須恵器の杯身・杯蓋の形状から判断して、SK-2出土遺物の時期は森田B-1期（8世紀前半から中期）、山村E期（8世紀第1四半期中から後半）～F期（8世紀第2四半期）であろう。

SC-3 突穴式住居跡（第8図）

遺構

4区の中央、台地平坦面に位置する。南東隅と北側半分をコンクリート基礎による搅乱のために削平されており、残存状況は不良。全容は不明だが、平面形は南北3mの長方形ないし正方形を呈する。主軸はN-114°-Eでカマドが東壁の中央部分につくられている。壁はほぼ垂直からやや外側に開くように削られていて、壁高は50cmを測る。ピットは住居西側に5基確認された。住居内に周溝を巡らし、深さは10cmを測る。床面は地山のローム層よりやや渋った色調の土を堀方の上に敷き、貼床としている。貼床の厚さは5cm前後である。埋土は一層で茶褐色土に褐色土・橙色土・炭化物が粒状に入るものである。

カマドは煙道部が突出する。中心軸長は80cm、燃焼口幅50cmを測る。燃焼口中央部に直径30cm深さ5cmの円形の凹みが存在する。壁・床面とともに火熱を受けた痕跡は認められなかった。カマド南側には袖部が残る。北側の袖部は存在しなかったが、地山が平坦に成形された部分があり、この上に粘土で袖がつくられていた可能性がある。カマドの土層にも白色粘土を含んだ5層がある（第8図）。カマドの土層の堆積状況をみると、ほとんど原型を留めておらず、カマドの天井が崩落した様子もみられない。カマドは住居が埋まる前にすでに破壊されていたものと考える。

住居の主軸方向、規模、形状、カマドの位置、周溝を有するなどの点は、隣接する第14次調査の突穴式住居跡SC001に類似している。

遺物

大きく削平を受けていたが残存している埋土からの遺物出土量は多かった。杯身は完形に近い形の出土があつたが、そのほかはすべて破損した形で出土し、全体の形状の分かるものはなかった。27・28が土師器、29～32が須恵器である。

杯蓋はツマミ有り（30）とツマミ無し（29）の2種類が認められる。29の口縁部は端部を直角に折り返している。30の端部形状は不明。31は杯身で口縁部が外側に大きく開き、高台の断面形状は長方形である。32は須恵器高环の脚部である。器の端部を下に折り返している。27・28は蓋の口縁部である。どちらも外側はハケ、内面を斜め下方向へのケズリを施す。

須恵器の杯身・杯蓋の形状から判断して、SC-3出土遺物の時期は森田B-1期（8世紀前半から中頃）、山村F期（8世紀第2四半期）であろう。

SD-4 溝状遺構（第9図）

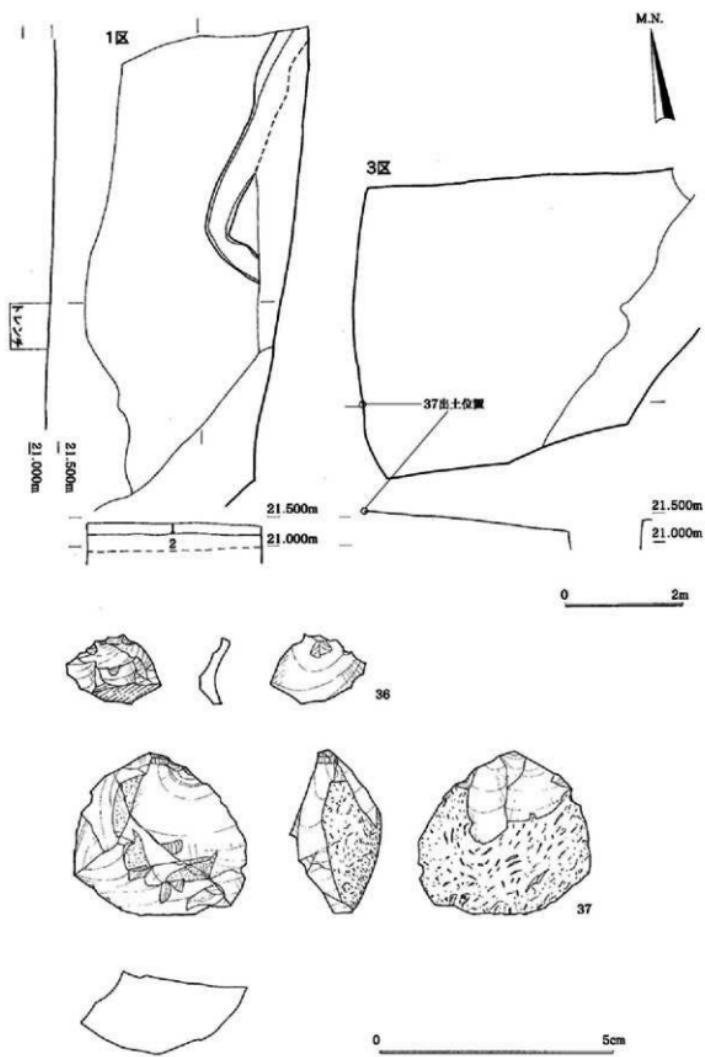
遺構

1区北側で検出された。斜面上に位置する。幅50cm、深さ10cmで底面の断面形が半梢円を呈する。底面には凹凸がある。南西方向に走っていた溝が、「く」の字状に折れ曲がり調査区域外へ延びている。壁際で搅乱に切られる。性格は不明。

遺物

遺物の量は少なかった。33は須恵器杯蓋のツマミ、34は須恵器杯蓋の口縁部、35は長頸壺の底部である。34は口縁端部を「く」の字状に折り曲げている。35は胴過半部を横方向の回転ケズリを施す。高台の断面形状は長方形である。

34の口縁端部形状から判断して、SD-4出土遺物の時期は森田B-1期（8世紀前半から中頃）、山村F期（8世紀第2四半期）であろう。



第10図 1・3区旧石器調査状況 (1/80) および1・3区出土遺物実測図 (1/1)

4. 旧石器時代遺物確認調査

調査の目的と方法

II章で述べたように本調査地点西側に隣接する14次調査地点や、北側の5次・7次・10次・13次調査地点において旧石器時代の遺物が確認されている。本調査地点でも旧石器時代遺物が出土する可能性があったため、古代の遺構の調査と全景写真撮影終了後に旧石器時代遺物確認調査を行った。雑削痕跡における過去の旧石器時代遺物の調査例ではいずれもローム層中より遺物の出土が見られた。本調査地点でもローム層を下げる地層を確認しながら、遺物の確認調査を行うという方法を探った。

対象としたのは1区南側と2区南側、および第14・15次調査地点に近くローム層の残りの良い3区である。どちらも全体を遺構検出面からローム層を50cmほど下げて確認した。

1区

1区中央部に東西方向にトレーナーを設置して深掘りし土層を観察した。その結果遺構確認面から20cm下を境に、部分的に粘土状である茶褐色土（第10図1層）とくすい黄色粘質土（第10図2層）に分かれることが確認できた。1層には一部土師器片が含まれていたが、2層には遺物は含まれていなかった。土層確認後、トレーナーから南側のローム層を全体に30cm下げた。その1区南側掘り下げ時に黒曜石剥片（36）が出土した。1層からの出土だが位置は不詳である。1層は土師器も含む包含層であるため、層位から旧石器時代の遺物と比定することはできない。

遺物

36は黒曜石の剥片である。縦15mm、横20mm、厚さ6mmを測る。人為的な時調整は見られない。剥片のため時期は不明。

2区

2区南側も1区と同様に、ローム層を全体に30cm下げたが遺物は出土しなかった。

3区（第10図）

斜面の傾斜にあわせて、ローム層全体を15cm前後下げた。その結果、3区西壁の中央部からやや南よりの地点において、遺構確認面から4cm下の場所から黒曜石の石核（37）を検出した。ただし遺構検出面とほとんど変わらないレベルでの出土のため、確実に旧石器時代の遺物とすることはできない。また、3区は第15次調査の弥生時代早期の木棺墓群から東へ20m離れた台地の斜面部であるため、弥生時代の遺物が流れこんだ可能性もある。

遺物

37は黒曜石の石核である。縦36mm、横37mm、厚さ18mmを測る。表は不定型に割れている。裏は原石の表面のままで風化した部分が残り、上部に剥片をはぎ取った痕跡が残る。定型的な石器でなく時期の比定は難しい。

IV. 小結

雑餉隈遺跡における古代の集落構造

本調査地点では8世紀前半の堅穴式住居2基と円形土坑1基を検出した。隣接する14次調査では14基、第15次調査では8基の奈良時代の堅穴式住居が見つかっており、調査担当者の掘苑氏がこれら堅穴式住居の規模と類型、主軸角度を基に雑餉隈遺跡の古代集落についての分析を行っている。その分析に従うとSC-1は長軸3.0m短軸2.8mでⅢ群に、SC-3も長軸3.0m短軸3.0mでⅢ群に該当する。Ⅲ群は第14・15次調査で検出された堅穴式住居の中でも最も小さい一群で、全て台地平坦面である第14次調査区で検出されている。SC-1・SC-3も本調査地点の台地平坦面上にあり、14次調査区のⅢ群と一群を形成するものと考えられる。時期はSC001が8世紀前半で、SC007・016・017が8世紀前半中葉以降である。Ⅲ群内での遺構の重複もみられないことから、本調査地点のSC-1・SC-3を含めたⅢ群が8世紀前半中葉に同時に併存していた可能性が考えられる。これらⅢ群は14次調査地点において一部で中型堅穴式住居群（Ⅱ群）を切るようにつくられていて、そのⅡ群堅穴式住居は8世紀前半中葉に位置づけられる。従って雑餉隈遺跡の古代集落は、8世紀前半中葉を画期として、当初（8世紀前半中葉）の台地平坦面の中型堅穴式住居群のみで構成されるという形から、台地平坦面にⅡ群と小型堅穴式住居群（Ⅲ群）が混在し、それらを取り囲むように台地縁に大型堅穴式住居（Ⅰ群）が位置するという形へと変化するようである。これは雑餉隈遺跡第5・8・10次調査でも大型のⅣ類住居が小型～中型のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類住居の囲い込みを目的とするように分布しているということが指摘されており、雑餉隈遺跡の奈良時代における集落構造の一類型となる可能性が高い。

弥生時代の木棺墓群の分布範囲

隣接する第15次調査地点から磨製石剣を供伴した弥生時代早期の木棺墓群が検出されたことから、本調査地点でも類例が検出される可能性があったが、弥生時代の遺構は検出されず、遺物も弥生時代の可能性のある黒曜石の剥片が出土したのみであった。特に3区は木棺墓群から東へ20mの距離であったが遺構そのものが存在しなかった。斜面のため削平を受けた可能性もあるが、木棺墓群の分布範囲は現状の分布範囲である15次調査区北側の径20mの円内にとどまる可能性が高い。これまで雑餉隈遺跡において弥生時代早期の遺構は14次調査以外では発見されておらず、この木棺墓群の埋葬者の居住域がどこであったのかも未だ不明のままである。今後の調査例の増加を待ちたい。

雑餉隈遺跡における旧石器時代遺物

雑餉隈5次・7次・10次・13次・14次調査地点で旧石器時代の石器が出土しており、本調査地点でも出土の可能性があったが、黒曜石の石核が1点出土したのみで、それも流れ込みの可能性があるものであり、他の調査地点のようにローム内より多数出土するということは無かった。他の調査地点が台地平坦面にあり、本調査地点において台地平坦面の大半は棍乱と削平をうけて残存状況が悪かったことと、残存した遺構面が台地縁の緩斜面であったことが影響していよう。今後の雑餉隈遺跡における調査では、調査地点が台地平坦面であった場合はローム層まで振り下げる旧石器時代遺物確認調査が必要となるだろう。

* 掘苑学J2005「N-2 古代の集落について」「雑餉隈遺跡5」福岡市埋蔵文化財報告書第866号 (ヨーリピック 埋蔵文化財調査室)
** 宮井哲朗1998「Y 小結」『雑餉隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財報告書第569号 (福岡市教育委員会)

第1表 雜物遺跡第17次調査出土遺物観察表

No.	遺構	大分類	小分類	部位	残存率	口径	高さ	底径	焼成	胎土
1	SC-1	須恵器	杯蓋		25% (15.4)	2.7			良好	やや細かい
2	SC-1	須恵器	杯蓋		100%	15.3	1.9		良好	やや細かい
3	SC-1	須恵器	杯身		80%	14.0	4.3	9.8	不良	やや細かい
4	SC-1	須恵器	杯身		90%	14.0	4.7	10.0	やや良好	細かい
5	SC-1	須恵器	壺?	底部	80%				良好	やや細かい
6	SC-1	須恵器	杯蓋		90%	18.4	1.9		やや不良	普通
7	SC-1	須恵器	壺		70% (19.4)	2.8	11.3		良好	やや細かい
8	SC-1	須恵器	壺		30% (20.8)	2.3			やや良好	やや細かい
9	SC-1	須恵器	壺		80%	20.4	3.6		不良	普通
10	SC-1	土師器	杯身		80%	18.2	6.0	11.7	やや不良	やや細かい
11	SC-1	土師器	壺	口縁部	>10% (32.2)				普通	粗い
12	SC-1	土師器	壺	口縁部	10% (30.0)				やや不良	粗い
13	SC-1	土師器	壺or瓶	把手	>10%	-			やや良好	やや粗い
14	SC-1	土師器	壺or瓶	把手	>10%	-			良好	やや粗い
15	SC-1	土師器	瓶	肩部	>10%	-			やや不良	粗い
16	SC-1	土師器	壺	口縁部	>10% (22.6)				やや不良	粗い
17	SC-1	土師器	壺	口縁部	>10% (19.8)				普通	やや粗い
18	SC-1	土師器	壺	口縁部	50% (18.0)				やや不良	粗い
19	SC-1	土師器	壺	口縁部	>10% (17.4)				普通	やや粗い
20	SC-1	土師器	壺	口縁部	>10% (17.0)				普通	粗い
21	SK-2	須恵器	壺	口縁部	>10% (13.0)				やや良好	やや細かい
22	SK-2	須恵器	長頸壺	肩部	>10%				良好	やや細かい
23	SK-2	須恵器	杯蓋	口縁部	25% (14.6) (1.8)				やや良好	やや細かい
24	SK-2	須恵器	杯蓋	口縁部	>10% (14.0)	1.6			良好	やや細かい
25	SK-2	須恵器	杯身	底部	>10%	-		(10.0)	良好	やや細かい
26	SK-2	須恵器	杯身		>10% (12.4)	5.0			良好	細かい
27	SC-3	土師器	壺		>10%				やや不良	粗い
28	SC-3	土師器	壺		>10%				普通	粗い
29	SC-3	須恵器	杯蓋	口縁部	25% (20.8) (1.5)				普通	細かい
30	SC-3	須恵器	杯蓋	ツマミ	>10%				やや不良	細かい
31	SC-3	須恵器	杯身		10% (15.0)	4.0			やや不良	細かい
32	SC-3	須恵器	高杯	脚部	>10%			(10.0)	良好	やや細かい
33	SC-4	須恵器	杯蓋	ツマミ	>10%				やや良好	細かい
34	SC-4	須恵器	杯蓋		>10% (18.2) (1.6)				良好	細かい
35	SC-4	須恵器	長頸壺?		>10%			(10.4)	良好	やや粗い
36	1区包含層	黒曜石	剥片		100%					
37	3区ローム層	黒曜石	剥片		100%					

図 版

PL 1



1. 崎駒廻遺跡第17次調査区 全景その1（南から）



2. 崎駒廻遺跡第17次調査区 全景その2（南から）



1. SC-I・SC-3 (南から)



2. SC-1 遺物出土状況 (西から)

PL 3



1. SC-1西側土層（東から）



2. SC-1土層（北から）



1. SC-I カマド土器（北から）



2. SC-I 完制状況（西から）

PL 5



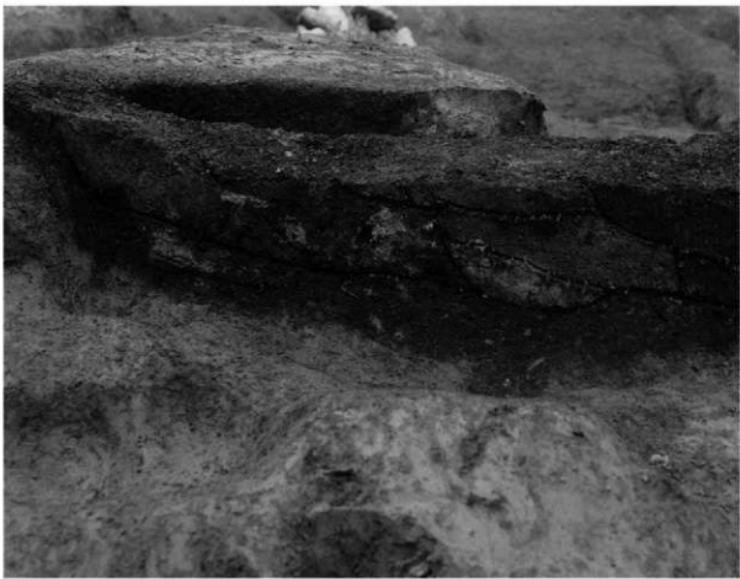
1. SK-2完掘状況（東から）



2. SK-2上層（東から）



1. SC-3 (西から)

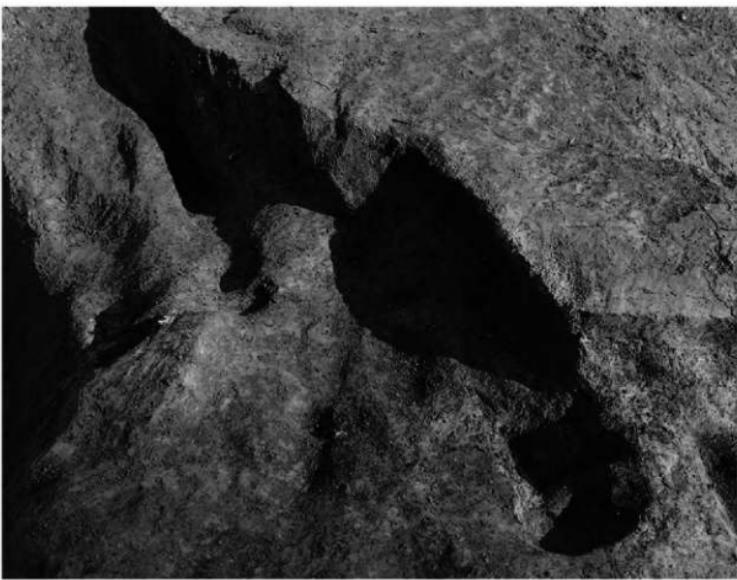


2. SC-3カマド土層 (北から)

PL 7



1. SC-3完成状況（西から）



2. SC-3カマド（西から）



1. SD-4完掘状況（東から）



2. I区深掘土層（南から）

PL 9



1. 調査前クスノキ移植作業風景（北西から）



2. 調査終了後状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくまいせき						
書名	雜餉限遺跡6						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	877						
編著者名	赤坂亨						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °'	° °'	m ²	
雜餉限遺跡 第17次	福岡県福岡市 博多区製和町 1丁目102番1	40130	0460	33° 32' 11"	130° 27' 51"	2004.11.01 ~ 2004.11.30	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項
雜餉限遺跡 第17次	集落/散 布地	奈良	集落-奈良-堅穴式住居2+円形土坑1+溝1-土師器+ 須恵器/散布地-時期不明-黒曜石石核1+黒曜石剥 片1				
要約	奈良時代の方形の堅穴式住居跡2基、円形土坑1基、溝状遺構1基を検出した。東側の14次調査で旧石器時代の遺物が出土していたが、本調査地点では確認できなかった。また弥生時代早期の木棺墓群も東側の15次調査で確認されたが、本調査地点では確認できなかった。本調査地点が雜餉限遺跡における奈良時代の集落の南限であること、15次調査で発見された弥生時代の木棺墓群の分布は東に広がらないこと、旧石器時代の散布地も本調査地点までは広がらないことなどが確認された。						

雜餉限遺跡6

2006年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

(092)711-4667

印刷 江口印刷

福岡市南区大楠2丁目22番8号

(092)531-4686